中期ハイデガーにおける形而上学の展開

一 現存在、世界の内部で出会われる存在者および世界の、把捉の深化に注目して 一

三谷竜彦

序

ハイデガーは、1928年夏学期講義『論理学の形而上学的始原諸根拠』の中で、 彼独自の形而上学を提示している。その形而上学は、存在への問いを意味する基 礎的存在論と、全体としての存在者への問いを意味するメタ存在論 (Metontologie) とからなっている (vgl. GA26, S. 196-202)。前者の基礎的存在論は、言うまで もなく『存在と時間』において探求された、あらゆる存在論の基礎となる存在論 である。後者のメタ存在論は、基礎的存在論を含むあらゆる存在論を超えた次元 にあるものとして、もはや存在論ではなく、形而上学的存在者論(metaphysische Ontik)という、一種の存在者論である。この両者の統一体が、ハイデガーの提 示する形而上学であり、この形而上学を展開することが、1928年以降、1930年代 中頃までの、すなわち形而上学の超克を試みるに至るまでの、ハイデガーの課題 であった。そしてこの形而上学の展開の中で、とりわけメタ存在論の展開の中で、 『存在と時間』において分析された日常的現存在や、それにとって出会われる存 在者や、そして日常的世界は、さらに深く捉えられて行くことになる。つまりそ れらのものは、その日常的なあり方の根源にまで遡って、分析されて行くことに なる。それではそれらのものは、その際具体的にどのような分析を被ることになっ たのか。我々はそのことを、本論考において確認して行くことにする。

1. 現存在の被投性の把捉の深化

ハイデガーによると、現存在は常にすでに存在を理解しつつ存在しており、この存在理解が、存在が現れて来る場として、あらゆる存在論の出発点となる。し

たがってこの存在理解を分析することが、すなわち基礎的存在論となる。ところが現存在は、存在を理解する前に、常にすでに存在者のただ中に投げ入れられて存在しており、この根源的な被投性が、基礎的存在論を含むあらゆる存在論が成立しうるための前提となる。この根源的な被投性を分析することが、メタ存在論である(*)。このようにメタ存在論は、現存在をその根源的な被投性にまで遡って分析するのであるが、しかし『存在と時間』において分析された日常的現存在の被投性は、そのような根源的な被投性から派生した、表層的な被投性であるに過ぎず、したがってこの表層的な被投性を、その根源へと向けて、より深く捉え直すことが必要となる。我々は、この現存在の被投性の把捉の深化の過程を、主に1928/29年冬学期講義『哲学入門』における記述に即して、確認して行くことにしよう。

ハイデガーによると、現存在は存在理解によって、己の存在を問題とするよう になる (vgl. GA27, S. 324-326)。そのように己の存在を問題とすることは、「己 自身のために (umwillen seiner selbst)」存在することを意味する (vgl. GA27, S. 324-325)⁽²⁾。しかしこの事態は、決して利己主義的に解釈されてはならない (vgl. GA9, S. 157; GA27, S. 324)。現存在は「本質上己の外へと歩み出てしまっ て」おり(GA27, S. 326)、「本質上決して存在者から孤立していない」のである (GA27, S. 328)。つまり現存在の「最も固有な存在に本質上属している諸々の存 在可能性」が、「他者との共存在や、直前的なもの(Vorhandenes)のもとでの 存在や、自己存在」とされているように(GA27, S. 324; vgl. GA9, S. 163)、 現存在の存在には常に、己自身への関係性とともに、己以外の存在者への関係 性も潜んでいるのである(vgl. SZ, S. 13, 85-87, 123, 152, 193-194, 324)。 こ のような関係性が、現存在が己自身および存在者へと引き渡されていること (Preisgegebenheit) である (vgl. GA27, S. 326)。 そしてこのような引き渡され ていることは、己の存在を問題とすることによってのみ成り立ちうるのであるか ら、それは「己自身のために」ということに、ひいては存在理解に、基づいて成 り立っていることになる (vgl. GA27, S. 326)。

ここで述べられている、存在理解や「己自身のために」ということに基づいて成り立つ、引き渡されていること、すなわち一種の被投性は、『存在と時間』にお

ける日常的現存在についての分析の際に論じられた、被投性である、と考えられ る。その理由は、以下のことである。1928年に成立し、1929年に発表された『根 拠の本質について』の、ある注の中で、『存在と時間』の中で自然が論じられて いないことの理由として、自然は環境世界や態度を取ること (sich verhalten) を通じてではなく、「ただ中で (inmitten)」ということを通じて出会われるから である、という趣旨のことが述べられている (vgl. GA9, S. 155-156Anm.)。と いうことはつまり、『存在と時間』における分析は、自然の出会われを可能とし ないような、環境世界や態度を取ることに定位してなされた分析であって、自然 の出会われを可能とするような、「ただ中で」ということに定位してなされた分 析ではない、ということになる。ここで「ただ中で」ということは、後で述べるよ うに、存在理解や「己自身のために」ということに基づいて成り立つ、引き渡さ れていることの、根源にあるような被投性を、特徴づける契機である。したがっ て『存在と時間』における被投性は、そのような根源的な被投性ではない、とい うことがまず確言されうる。そして環境世界は、現存在にとっての環境世界とし て、現存在自身の「ために(Umwillen)」ということに基づいて、成り立つもの であり (vgl. SZ, S. 83-88, 143-147, 192)、また態度を取ることは、存在理解や 「己自身のために」ということに基づいて成り立つ、引き渡されていることに、 さらに基づいて成り立つものである(3)。したがって『存在と時間』における被投 性は、存在理解や「己自身のために」ということに基づいて成り立つ、引き渡さ れていることとしての、被投性を意味している、と考えるのが妥当であろう。

それでは『存在と時間』において論じられた、日常的現存在における被投性、すなわち存在理解や「己自身のために」ということに基づいて成り立つ、引き渡されていることは、さらに深く分析されると、どのようなものとして明らかになるのであろうか。ハイデガーによると、それは存在者の「ただ中で」被投的にあることとして明らかになる(vgl. GA9, S. 165-166; GA27, S. 328-331)。ここで「〈ただ中で〉ということが意味しているのは、現存在が、それへと己が引き渡されている存在者によって、徹底的に支配されていることである」(GA27, S. 328; vgl. GA9, S. 166)。そして、そのように現存在を徹底的に支配している存在者が、自然である。その際の自然とは、「原則的により広くより根源的な」捉

え方をされた自然であり、それはすなわち「ナートゥーラ (natura)、ナースキー (nasci)、それ自身の方から (von sich her) ということであって、自由な自己としての現存在は、これに対して無力である。現存在は・・・自然へのあらゆる自由な態度を取ることの前に、自然のただ中に存在しているのである」(GA27, S. 329)。

このように、より深く捉えられた被投性は、自然へと無力に引き渡されていること、自然によって徹底的に支配されていることとして、明らかになる。これこそ、あらゆる存在理解および存在論の前提となる、根源的な被投性であり、したがってメタ存在論の分析の対象となるものである。ハイデガーは、1928/29年冬学期講義『形而上学の根本諸概念』の中で、自然へのこの根源的な被投性について、さらに考察を進めている。そして、そのことによってハイデガーは同時に、世界の内部で出会われる存在者の把捉を、より深いものとして行くことになる。

2. 世界の内部で出会われる存在者の把捉の深化

『形而上学の根本諸概念』の中では、自然はピュシス(physis)という名で論じられている。その際ピュシスは、支配しつつある全体としての存在者およびその存在を意味する(vgl. GA29/30, S. 38-39)。人間は、ピュシスという「この全体的な支配によって徹底的に支配されており、そしてそれに対して無力である」(GA29/30, S. 39)。このことは、『哲学入門』の中で述べられていた、根源的な被投性の規定そのものである。ところでしかし、人間はピュシスによってただ支配されているだけではない。ピュシスによって支配されながらも、その一方で「人間は・・・ピュシスについて常にすでに・・・言明してしまっている」(GA29/30, S. 39-40)。ここで言明することは、ギリシア語でレゲイン(legein)と呼ばれるものである。このロゴスは、ピュシスについて言明されたものであるから、ロゴスは「すでに必然的にピュシスの中にあり」、「ピュシスに属している」ことになる(GA29/30, S. 40)。したがってロゴスは、レゲインによって言明されている限りでのピュシスである、ということになる。そしてハイデガーは、レ

ゲインおよびロゴスと、ピュシスとの関係を、非隠蔽性(Unverborgenheit)と 隠蔽性(Verborgenheit)という観点において性格づけている。ハイデガーは、 $\sim 50 \, \text{LV} + \text{L} = 10 \, \text{L}$ (Verbergen) を意味するクリュプテイン(kryptein)の反対語として用いられていることから、 $\sim 50 \, \text{L} + \text{L} = 10 \, \text{L}$ (kryptein)の反対語として用いられていることから、 $\sim 50 \, \text{L} + \text{L} = 10 \, \text{L}$ (を取り除くことであり、ロゴスは、そのようなレゲインによって言明されたピュシスとして、隠蔽性から取り出され、 覆いを取り除かれたピュシスである、としている(vgl. GA29/30, S. 40-41)。 そしてこれに対して、ピュシスそれ自身は、常にそれ自身を隠蔽しようと努めている、とされる(vgl. GA29/30, S. 41)。

ここで我々は、ロゴスに注目しよう。ここで述べられているロゴスは、世界の 内部で出会われる存在者(必ずしも日常性において出会われるそれに限定される わけではない) およびその存在を意味する、と考えられる。まずロゴスが存在者 および存在を意味することは、ロゴスが、非隠蔽的なピュシスという一種のピュ シスであり、そのピュシスが存在者および存在を意味する、ということから明ら かである。次にロゴスの意味する存在者および存在が、世界の内部で出会われる 存在者およびその存在として確定されうるのは、次の二つの理由からである。一 つ目は、レゲインおよびロゴスが、隠蔽的なもの(ピュシス)に対する非隠蔽的 なものであるのと同様に、後に述べるように、世界もまた隠蔽的なもの(ピュシ ス、あるいは大地)に対する非隠蔽的なものである、ということである。二つ目 は、1935年夏学期講義『形而上学入門』の中で、レゲインおよびロゴスが、それ を通じてピュシスが世界として非隠蔽的になるところの、人間の暴力活動 (Gewalttätigkeit) に属する、とされていることである (vgl. GA40, S. 178)。 このことはさらに、世界形成 (Weltbildung) に携わる企投 (Entwurf) や言語 が、レゲインおよびロゴスと同じものである、あるいは少なくとも密接な関係に あることによって、裏書きされる。ハイデガーによれば、「世界が支配するのは、 企投することという性格を持った支配させることの中で、そしてそのことにとっ てである」(GA29/30, S. 526-527)。また言語とは、「その中で世界の開明性 (Offenbarkeit) および告知性 (Kundschaft) がそもそも裂け開き、そして存在 するところのもの」であり(GA33, S. 128)、したがって「言語の力で、そして

言語の力によってのみ、世界は支配するのであり、存在者は存在するのである」 (GA38, S. 168; vgl. GA4, S. 38; GA39, S. 62)。このような企投や言語がレゲインおよびロゴスと密接な関係にあることは、いくつかの著作の中ではっきりと述べられているで。レゲインが世界形成に携わるとすれば、その世界の中に存在することになる存在者およびその存在は、ロゴスである、ということになるであろう。したがってこれらのことから、ロゴスは、世界の内部で出会われる存在者およびその存在を意味する、ということが言えるであろう。

ところでピュシスは、そのロゴスの生成の基盤として、そのロゴスの根源にあるものである。ハイデガーは『形而上学の根本諸概念』において、ロゴスとしての、世界の内部で出会われる存在者およびその存在の、いわば表層性を明白にし、同時にピュシスとしてのその根源を明らかにしているのである。そしてハイデガーはこれに続いて、『形而上学入門』や、1935年および1936年の講演『芸術作品の根源』において、今度は世界を、その根源へと向けて、さらに深く分析して行くことになる。それでは次に、世界の捉え方がどのように深まって行くのかを、確認して行くことにしよう。

3. 世界の把捉の深化

『存在と時間』において分析される日常的世界は、環境世界である。先に述べたように、環境世界の中では自然は出会われない。それがもし出会われるとすれば、もはや自然としてではなく、道具としてである(vgl. SZ, S. 70-71)。したがってこのような環境世界は、自然(ピュシス)への根源的な被投性からは、極めて遠く隔たったところに成り立つような世界である、と言うことができるであろう。ペゲラーは、『存在と時間』における環境世界分析の問題点について、次のように述べている。

「〔世界についての〕道具から出発する分析は、何かが有意義性連関の内に立ち現れないことを、もちろん積極的に受け取ることができない。しかしこのことによって、そのような分析は、世界のある本質的な構造契機を覆い隠してしまう。その

本質的な構造契機とは、隠蔽的であらしめることであり、諸々の有意義性関連の内への存在者の単なる立ち現れを拒むような、匿うことである。環境世界としての世界がその内に基づいているところの、ためにということは、有意義性を企投しつつある理解の方から一方的に思惟されており、他方この理解の被投性および情態性は、背景の内にとどまっている。かくして世界は、環境世界の内においては、その根源的な本質においてそれ自身を示さないのであり、したがってそれはまた、例えば根源的に経験された自然を出会わせることができないのである」⁽⁹⁾。

このようにペゲラーは、『存在と時間』における環境世界概念は、世界における根源的な本質契機としての隠蔽的契機を捉えることができないため、不十分なものである、と考えている。そして彼は、その世界における隠蔽的契機が、後に『芸術作品の根源』において、大地として捉えられるに至る、と考えている⁽¹⁰⁾。この見方は極めて的確なものである。我々は以下において、大地がどのようにして世界の根源をなすものとして論じられるようになるのか、ということを確認して行くことにしよう。

『形而上学入門』の中で世界は、ピュシスが非隠蔽的になったものである、とされている(vgl. GA40, S. 66)。このことから世界の根源は、ロゴスの根源と同様にピュシスである、ということが言える。そして大地は、ピュシスの詩的表現である、と考えられる。ハイデガーは、1934/35年冬学期講義『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』の中で、ヘルダーリンの用語である大地について考察している。それによれば、ヘルダーリンの詩作において大地は、「根源的な意味において隠蔽的なもの」であり、「隠蔽性そのもの」である(GA39, S. 242)。このようなものとして大地は、ハイデガーにおける、それ自身を隠蔽しようと努めるピュシスと、合致する。その後、大地は『芸術作品の根源』において、ヘルダーリン解釈という文脈を離れて、ハイデガー自身の用語として論じられることになるのであるが、それはピュシスの詩的表現としてである、と考えられる。そもそも『芸術作品の根源』の主題は、芸術作品であり、芸術作品の根源としての芸術であるが、ハイデガーにとって芸術の本質は詩作である(vgl. GA5, S. 59-63)。そしてハイデガーにとってベルダーリンは、詩人および詩作そ

のものについて詩作した、詩人の詩人であり(vgl. GA4, S. 34, 47; GA39, S. 30, 218-221, 252)、最大の詩人である(vgl. GA39, S. 6)。したがってハイデガーが『芸術作品の根源』の中で、詩作としての芸術を主題として論じる際、その詩作としての芸術において出会われるピュシスは、詩人の詩人であり最大の詩人であるヘルダーリンの言葉で、すなわち大地として、語られることになった、と考えることができるであろう(11)。このようにして、大地はピュシスの詩的表現である、と言うことができるのである。そうすると、大地は一種のピュシスとして、世界の根源である、と言うことができる。世界はかくして、その根源を大地として明らかにされる、というようにして、その捉えられ方が深まって行ったのである。

結び

以上において我々は、形而上学の、とりわけメタ存在論の展開とともに、現存在の被投性、世界の内部で出会われる存在者および世界が、それぞれどのようにして、より深く捉えられて行ったのかを見た。そのことによって我々は、日常性に陥る以前の、それらのものの根源的なあり様を、捉えることができる。根源的には、現存在は自然、ピュシス、大地へと、徹底的に引き渡されているのである。1930年代後半以降、ハイデガーは形而上学の超克を試みるが、しかし形而上学の探求によって獲得された、そうした根源的なあり様への理解は、超克されることなく、その後も受け継がれ、さらに深められて行くことになる。そのことを我々は、1946年にほぼ成立し、1947年に発表された『ヒューマニズムについて』等において確認することができる。その限りで形而上学の探求が、ハイデガーの思惟の発展において果たした役割は、非常に大きいものであった、と言うことができるであろう。

注

ハイデガーの著作からの引用および参照の指示に際しては、全集版からの場合は、GAに巻数とページ数とを併記する。全集版以外の著作からの場合は、以下の略記号を用いる。 SZ: Sein und Zeit, 17. Aufl., Max Niemeyer, 1993

- (1) 形而上学が二重の探求から成り立つ、という考えは、アリストテレスから受け継いだものであり、基礎的存在論が、アリストテレスの第一哲学に、そしてメタ存在論が、アリストテレスの神学に、それぞれ対応する。しかしメタ存在論の具体的内容の形成には、アリストテレスの神学よりも、カッシーラーの『シンボル形式の哲学』第2部「神話的思惟」の方が、重要な役割を果たしている、と思われる。ハイデガーは、1928年に発表された書評「エルンスト・カッシーラー『シンボル形式の哲学』第2部「神話的思惟」、ベルリン、1925年」の中で、カッシーラーの主張する、非日常的な存在者の力および神聖さについて、あるいは神話的人間と世界との原初的な未分化およびその後の分化等について、取り上げて論じている(vgl. GA3, S. 255-270)。これらのカッシーラーの考えは、1928年以降のハイデガーのメタ存在論の探求の中に、すなわち現存在の根源的な被投性についての分析の中に、基本的にほぼそのままの形で取り入れられている。カッシーラーのこの本が、ハイデガーのメタ存在論の具体的内容の形成に大きな影響を与えていることは、疑いえないであろう。
- (2) 「己自身のために」ということは、したがって自己性(Selbstheit)を意味する(vgl. GA9, S. 157; GA27, S. 324)。「己自身のために」という語は、『根拠の本質について』や『哲学入門』の後、ほぼ用いられなくなり、その代わりとして自己性という語が用いられるようになる(vgl. GA29/30, S. 397-398; GA40, S. 152)。また『論理学の形而上学的始原諸根拠』においては、プラトンの善のイデアの意味は「ために」ということである、とされていたのが(vgl. GA26, S. 237-238)、1931/32年冬学期講義『真理の本質について』においては、それは力の付与(Ermächtigung)である、とされている(vgl. GA34, S. 95-112)。
- (3) 「現存在が存在者へと、また己自身へと引き渡されていることは、己自身のためにということに基づいているのであるが、このような引き渡されていることのみが、存在者への何らかの相互対立 (Auseinandersetzung) や態度取り (Verhaltung) を可能にする」(GA27, S. 326)。

ところで、ここで態度取りという語と並んで、相互対立という語が用いられているが、この相互対立という語に注目することは、1928年以降、1930年代中頃までの、ハイデガーの思惟の展開について考察する上で、重要である。なぜなら相互対立というある種の関係性は、その時期のハイデガーの思惟の中で、一貫して用いられているからである。『哲学入門』における人間と存在者との相互対立は、『形而上学の根本諸概念』の中で、人間のロゴスとピュシスとの相互対立へと引き継がれ(vgl. GA29/30, S. 41-45)、それはさらに『形而上学入門』の中で、人間的なロゴスとピュシスとの相互分離(Auseinandertreten)に対応する、人間と存在者との相互対立へと引き継がれている(vgl. GA40, 4. Kap. C)。このように、人間と存在者との相互対立という構図は、その時期のハイデガーの思惟の中で、一つの枠組みを形成している、と言ってよいであろう。

- (4) このようにメタ存在論の展開とともに、被投性の把捉はより深まって行った。したがっ てゲートマンージーフェルトが、『存在と時間』と『芸術作品の根源』とを比較して、 『芸術作品の根源』は『存在と時間』に比して被投性を「極めて強調している」、と捉え ていることは、適切である (vgl. Annemarie Gethmann-Siefert, "Heideggers Bestimmung des Kunstwerks - im Rückblick auf "Sein und Zeit", in Philosophie und Poesie: Otto Pöggeler zum 60. Geburtstag, Bd. 2, hrsg. von Annemarie Gethmann-Siefert, Frommann-Holzboog, 1988, S.147)。しかし彼女は、芸術作品 が民族共同体の何らかの歴史的伝統から生じることを、自然(ピュシス)および大地へ の被投性として捉えているが (vgl. A. Gethmann-Siefert, op.cit., S. 153)、この捉 え方にはいささか問題がある、と思われる。確かに歴史的伝統から生じることは、歴史 的伝統に制約されていることであり (vgl. A. Gethmann-Siefert, op.cit., S. 162)、 したがって歴史的伝統への被投性を意味する。しかし『形而上学入門』の中でハイデガー が述べているように、「伝承からの指図(Zuweisung aus Überlieferung)」は、ピュ シスに「対立する現象」としてのテシス (thesis) やノモス (nomos) やエートス (ēthos) に関わるものである(vgl. GA40, S. 18)。したがって、もし歴史的伝統への被投性が、 「伝承からの指図」を意味するとすれば、ゲートマンージーフェルトの捉え方は明らかに 誤りであることになる。ところでその際エートスは、「自由な態度取りおよび構え (Haltung)」に関わるものであり (GA40, S. 18; vgl. GA18, S. 106; GA27, S. 379)、 そして構えは、「己自身のために」ということと密接に連関している(vgl. GA27, 366-3 70)。したがってこのようなエートスに関わる、「伝承からの指図」という意味での歴史 的伝統への被投性は、『存在と時間』における被投性と同様に、存在理解や「己自身のた めに」ということに基づいて成り立つ被投性に当たる、と考えてよいであろう。
- (5) ピュシスについては、すでに1929年夏学期講義『ドイツ観念論と現代の哲学的問題状勢』の中で、『形而上学の根本諸概念』におけるほど詳細にではないが、いくつかの点で同様のことが論じられている(vgl. GA28, S. 23-26)。
 - ところで『形而上学の根本諸概念』の中では、ナートゥーラ、ナースキーというラテン語は、「ギリシア語のピュシス、ピュエイン(phyein)の根本意義」を言い表している、とされているが(vgl. GA29/30, S. 38)、しかしこの考えは後に覆されることになる。『形而上学入門』の中でハイデガーは、ナートゥーラという「このラテン語訳でもっては、しかしすでに、ピュシスというギリシア語の根源的な内容が押しのけられているのであり、ギリシア語の本来的な哲学的呼称力が粉砕されているのである」(GA40, S. 15)、と述べている。
- (6) このような全体としての存在者としてのピュシスには、いわゆる自然、すなわち人間 の歴史に対する反対概念としての自然だけではなく、まさにその人間の歴史や、さらに は神的な存在者も含まれている (vgl. GA29/30, S. 39)。このことは、『哲学入門』の中

で自然が、「原則的により広くより根源的な」捉え方をされた自然である、とされていたことに対応する。

(7) まず企投とレゲインおよびロゴスとの密接な関係について確認しよう。『存在と時間』において、企投は理解の一つの性格であり(vgl. SZ, S.145-148)、レゲインおよびロゴスはまず第一に語り(Rede)であるが(vgl. SZ, S. 32)、この語りとしてのレゲインおよびロゴスは、理解の可能性の分節化である(vgl. SZ, S. 161-166)。また語りとしてのレゲインおよびロゴスは、覆いの取り除きであるが(vgl. SZ, S. 32-33)、この覆いの取り除きとしてのレゲインおよびロゴスに由来する、アリストテレスのロゴス概念、すなわちアポファイネスタイ(apophainesthai)およびアポファンシス(apophansis)は(vgl. SZ, S. 32; GA29/30, S. 44; GA40, S. 179)、理解に基づく解釈の、ある派生的な様態をなしている(vgl. SZ, S. 153-154)。また『形而上学の根本諸概念』においては、アポファンシスとしてのロゴスは企投に基づいている、とされている(vgl. GA29/30, S. 492-532)。

次に言語とレゲインおよびロゴスとの密接な関係について確認しよう。先ほども触れたように、『存在と時間』において、レゲインおよびロゴスはまず第一に語りであるが、この「語りが外へ言明されたものが言語である」(SZ. S. 161)。また1931年夏学期講義『アリストテレス『形而上学』 $\Theta1$ -3』や、1934年夏学期講義『言語の本質への問いとしての論理学』においては、ロゴスの意味として語りや言語が挙げられている(vgl. GA 33, S. 5, 121-122, 128; GA38, S. 169)。

- (8) 『存在と時間』や『形而上学の根本諸概念』においては、ロゴスおよびレゲインは、語りや言語や覆いの取り除きとして、その意味を規定されているが、『アリストテレス『形而上学』 $\Theta1$ -3』以降、それらの意味は、ロゴスおよびレゲインの意味としては二次的なものとされるようになる(vgl. GA33, S. 5; GA40, S. 178-181)。この講義以降、ロゴスは何よりもまず集約(Sammlung)を意味する、とされるようになる(vgl. GA33, S. 5, 121; GA40, S. 132-134)。そしてさらに『形而上学入門』に至ると、ロゴスはそのような集約として、人間的なものであるよりも、まず存在を、すなわちピュシスを意味する、とされるようになる(vgl. GA40, S. 139)。この一連の経過が意味しているのは、メタ存在論の展開とともに、ピュシスへの根源的な被投性が強調されて行くにしたがって、ロゴスの意味規定もまた、その根源がより重視される方向へ向かって行った、ということであろう。
- (9) Otto Pöggeler, Der Denkweg Martin Heideggers, Günther Neske, 1963, S. 208.
- (10) Vgl. O. Pöggeler, op.cit., S. 211-215.
- (11) 大地はまた、ソフォクレスの詩作『アンティゴネ』の中にも登場する(vgl. GA40, S. 155-157)。そこにおいて大地は、「神々の中でも最も卓越したもの」(GA40, S. 155)、「神々の中で最高のもの」であり(GA40, S. 163)、ハイデガーによれば、人間の暴力

活動と対抗関係にある、制圧的なもの(das Überwältigende)としてのディノン (deinon)である(vgl. GA40, S. 162-163)。そしてこの制圧的なものとしてのディノンは、ハイデガーによれば、存在としてのディケー(dikē)であり、したがってまたピュシスである(vgl. GA40, S. 169, 175)。このことからも、ハイデガーにとって大地とピュシスとが同じものであることが、見て取られうる。

(みたに たつひこ 哲学)